

白い巨塔 (上)

山崎豊子



新潮文庫

新 潮 文 庫

白 い 巨 塔

上 卷

山 崎 豊 子 著



新 潮 社 版

白
い
巨
塔
上
卷

一章

消毒薬で手を洗い、看護婦の差し出したタオルで横柄に手を拭うと、財前五郎は、煙草をくわえて、外来診察室を出た。

とくに正午を過ぎ、もう一時近かったが、病院の長い廊下には、まだ午前中の患者が折れ重なるように古びた椅子に坐り、自分に廻って来る順番を待っていた。どの顔も、病いを抱えている不安と焦燥に疲れ、落着きのない表情で、探るように互いの顔を見詰めている。財前五郎は、そうした病院の廊下を歩く時は、きまってわざと気難しい顔つきをして、通りぬけることにしている。それでも患者たちは、財前五郎であることが解ると、申し合わせたように椅子から立ち上って、畏敬と信頼に満ちた黙礼をした。

「やあ——」

短かい応答をして通りぬけながら、財前五郎は、国立浪速大学附属病院の第一外科が、医長の東貞蔵教授より、助教授である自分の力柄と評判によって支えられていることを自分自身の眼で感じ取っていた。

事実、昨日の胃癌の手術も、財前五郎の執刀であればこそ、成功したのかもしれない。医長の東教授は、発癌の理論研究については著名な学者であったが、手先が不器用というのか、メスの扱い方は、衆目の見るところ財前五郎の方が優れている。昨日の胃癌手術の患者のように噴門部

（胃の入口）に癌が拡がっている場合は、ほかの胃体の手術と異り、噴門部を切除して、食道と胃をうまく吻合しなければならぬ。その食道、胃吻合手術が財前五郎の得意とするところであったし、医学ジャーナリズムでも、「食道外科の財前助教授」と云われているのだった。

食道外科の財前助教授——、その言葉の持つ個人的で華やかな意味を味うように財前五郎は、口の中で呟き、五尺六寸、筋肉質のがっしりとした体軀と自信に満ちた足どりで、廊下から中庭へ出、新館増築にかかっている建築場の方へ足を向けた。

敷地九千坪の浪速大学病院は、昭和四年から建っている大理石の太い柱頭を持った重々しい旧館に隣接して、五階建、延一千五百坪の新館が増築されつつあるのだった。昨年の九月から工事にかかり、今年の九月に完成予定になっている。あと六カ月ほどで完成の運びになっている建物、五階建の鉄骨に鉄筋が巻かれてコンクリートの打ち込みがはじまっている。眩いほどの春の陽ざしに照らされた建築現場の方へ近附くにつれ、コンクリート注入タワーやクレーンが突ったち、コンクリート・ミキサーや捲揚機の騒音が高くなり、碁盤の目のように組んだ高い足場の間に、黄色いヘルメットをかぶった大木組の作業員が、忙しくたち働いている。

「先生！　この間はどうも、うちの者がお世話になりました」

騒音の中から大きな声がし、振り向くと、現場主任の加藤が、カーキ色の作業ジャンパーの襟を汗に滲ませながら、丁寧に頭を下げた。一週間前に、作業中に小さな事故を起した労務者の足の傷を第一外科で処置してやったのだった。

「いや、あれは、たいしたことないよ、軽い裂傷と打撲傷だから十日もすれば癒るだろう」

「おかげさまで、手当を早くして戴いたので破傷風にもならずにすみました、ところで先生の第一外科は、この新館のどちらへお入りになるのです」

加藤現場主任は、六分通り進行したコの字型の建物を指した。

「あの南側の一角だよ」

そう云い、堂島川に面して南側に大きな窓を取っている階下の一角へ眼を向けた。

「そうしますと、先生のお入りになりますところが、新館の中で、場所といい、広さといい、正面玄関からの便利さといい、まさに一等地ということになりますな」

「そりゃそうだよ、病院で一番力のある、患者の多い科が、一番いい場所と設備を要求するのは当り前だよ」

新しい煙草に火をつけながら、その方へ眼を遣り、白い煙の輪を吐いた。

南側一階の一番広いスペースと快適な場所を第一外科、その次が第二外科、その次が第一内科と第二内科、その次が産婦人科というような順で、臨床十六科が、新館の各診察室と病室とを分け取りするのであるから、そのうちのいずれかの科が、一日中、陽の射さない薄暗い北側、もしくはカンカン照りの西陽の入る西側の部屋へ入らなければならないとしたら、その貧乏くじを引き当てるのは、当然、教授の権力の弱い、最も政治力の無い科になる。

それが大学病院における「建物に現われた権力主義」というものであった。その証拠に、現在、各科が入っている五階建、延二千三百坪の旧館の場合でも、正面玄関に近い一階で、エレベーターと薬局にも近い最も便利なところを、浪速大学病院の表看板である第一外科が占居し、齒科、眼科、レントゲン科など、教授に政治力のない科は、正面玄関から遙かに離れた陰気くさい不便な部屋があてがわれ、年中、顔色の悪い婦長が、きんきん不機嫌な声で患者の名前を呼びたて、すべてが陰気くさく、貧相である。

財前五郎は、もう一度、新館竣工後、そこに入るのになつてゐる建物の方を眺めた。鉄筋五階建の建物の二階以上は、南に向つてテラスと大きな窓を持ち、窓の下には、堂島川が流れ、川を隔てた真向いに大阪市庁と、公会堂の青銅色のドームが聳え、街中というのに、時々、白い羽を持った鳩がドームの上に舞い降りてゐる。それはもう二十数年間、毎日のように見馴れて来た退屈な景色であつた。

国立浪速大学医学部の学生として、はじめてその景色を見た時は、すがすがしい眼に沁み入るような清澄な景色であつたが、医学部を卒業後、病理学教室で博士論文のための研究をしながら、第一外科医局に入局し、無給助手からはじまつて、有給助手、講師、助教授になり、今日に至るまで二十四年間、同じ景色を見馴れてゐると、何時の間にか、退屈なありふれた景色になつてしまつた。しかし、そのありふれた退屈な景色が、ここ一年ほど前から俄かに、財前五郎にとって、退屈でない風景に見えて来ているのだった。

それは、助教授である彼が、次第に第一外科の次期教授の有力候補者としてあげられるようになったからであつた。

医長の東教授が、来年の春に停年退官になるからである。といつて、東教授退官即、財前助教授の後任教授昇格とはきまつてゐない。臨床十六科と基礎十五講座の三十一人の教授で構成されている医学部教授会の選挙の票決によつて、東教授の後任教授が決まるのである。東教授に対しては、この八年間、忠実な右腕になつて医局のために尽して来たから、東教授自身は長年の女房役の財前助教授をさしおいて、他の大学から後任教授を移入するとは考えられなかったが、問題は東教授以外の三十人の教授が投じる票の行方であつた。

医学部長の鵜飼教授をはじめ、三十人の一くせも二くせもある教授たちの顔を、次々に思い

かべると、財前五郎の思惑は、必ずしも安心したものではなかった。その理由は、まず、財前自身に実力があり、とかく妬まれる存在であり、第二に、国立大学の教授会の選挙による票決といえども、奇怪な票の流れ方をするところがあるということであった。それを考えると、財前五郎は、東教授が退官する来年の春までのこの一年の間が、自分にとってかけがえのない重大な時期で、この期間の最も緻密な計算と周到な行動によって、自分の一生が決まってしまうかもしれないと思つた。

外部から見れば、国立大学医学部の教授と助教授との地位は、紙一重、もしくは、たった一段階の違いぐらいにしか見えないようであったが、現実には、教授と助教授の差は、馬鹿々々しいほどの差があり、財前五郎は、この八年間、その馬鹿々々しさに従属して来たのだった。

五十人余りの人員をかかえる医局の中で、助教授の役目は、二人の講師と十八人の有給助手と、その他はすべて無給の助手と研究生という大世帯の統率と、万承り解決役であった。医局員の勤務の不満から、無給の研究生のアルバイト先の斡旋、彼らの博士論文のテーマの相談と指導まで、すべて助教授が引き受けなければならぬ。その上、医局の研究費の捻出方法まで頭を搾り、それが出来なければ有能な助教授といわれないから、始終、治療と関係のある薬品会社や医療器具会社とのつきあいもよくし、幾ばくかの研究費の醸出をさせるように仕向けなければならなかった。

したがって、助教授などというものは、次期教授を約束されておればこそその助教授で、万年助教授など、軍隊でいえば内務班の班長のようなもので、医局内部の雑務を一手に引き受け、教授の縁の下で力持ちを勤める割の合わないポストであった。

財前五郎が、この八年間、地方大学からあつた教授の口に耳もかさず、この割の合わない助教

授のポストを辛抱強く勤めて来たのは、東教授が退官した後の教授の椅子を得るための忍耐であった。それだけに、何としても、来年の春の東教授退官の機会に、教授に昇格しなければ、国立浪速大学医学部教授のポストにつく機会を失い、万年助教授で終るか、それとも地方の医科大学の教授に転出させられてしまうかもしれない。浪速大学医学部の教授の停年は六十三歳であるから、東教授の退官のチャンスははずせば、また次の新任教授が停年になる時まで待たねばならない。ということは、四十三歳の財前五郎にとって、永遠にその機会を失うことに等しい。

そんな馬鹿なことが、外科の助教授として俺ほどの実力のある者が何という気の弱い、ありそうもないことを考えるのだ——、財前五郎は、その精悍（せいけん）なぎよろりとした眼に鋭い光を溜（た）め、毛深い手で唇の端にくわえている煙草を、ぽいとコンクリートのガラの上へ投げつけると、さっきと同じように自信に満ちた足どりで、助教授室のほうへ足を向けた。

東教授は、英国製のクラウン葉巻をくゆらせながら、教授室の窓から見える新館増築現場を眺めていた。

窓から射し込む明るい陽ざしの中で、半ば白くなった頭髮が銀色に輝やき、眉の下に動きの少ない眼をじっと見開いている東教授の姿は、停年退官を一年先にひかえた人とは思えぬ余裕と威厳に満ちた容姿であった。

余裕と威厳——、それは、東の最も愛好する言葉であった。どんな場合でも、国立大学教授としての余裕と威厳を失わないということが、彼の生活信条であった。

東京の国立東都大学の医学部を卒業し、三十六歳で同大学医学部の助教授になり、四十六歳で

大阪の浪速大学医学部の教授になつて、今日に至るまでの間、この信条を変えずにやつて来、それが今日の東の外見と地位をつくりあげていたのであった。

内心は人一倍小心で、石橋を叩いても渡らぬほどの臆病な性格であつたが、そんな氣振けぶりは噤おくびにも出さず、余裕と威厳に満ちた表情とポーズを取りつくりつてしていると、何時の間にかそれが、東貞蔵の特異な風貌になり、彼をして医学部の有力教授の一人にってしまったのだつた。新館増築の運動にしても、医学部長の鵜飼教授と彼が五年前から文部省に働きかけ、やっと昨年、昭和三十七年度予算として承認されたのであつた。

予算二億五千万円の鉄筋五階建の新館は、完成後は最新の病室設備と診療器械を誇る病院になり、第一外科は、その正面玄関左寄りの南側の診療室を確保することが出来るのであつたが、来年の春に停年退官を迎える東は、僅かな期間しかそこにおさまれない。しかし、新館増築の功勞を記念して、医学部のどこかに歴代の名誉教授と並んで、自分の胸像がたてられるであらうし、第一、目前にひかえている退官後の行先が、りっぱに保証されるであらうことを考えた。

退官後のことを考えると、浪速大学の現役教授の椅子で退官を迎えることは、他の地方で退官を迎えるより倅しあひせなことであるかもしれない。東都大学医学部の助教授から浪速大学医学部の教授に転じた当時は、母校の東都大学で教授になれなかったことを終生の痛恨事に思い、暫く思ひきれずにいたものであつたが、三年ほど経つと、経済都市の大阪にある浪速大学医学部の教授に転じたことは、長い人生を通してみると、決して損ではなかったと思うようになった。

東都大学に残つて、学問一筋の学者生活を貫くのならともかく、学問的業績とともに、そこそこの経済的余裕をも望むのであつてみれば、財界人の大物クラスの患者が、ずらりと居並ぶ浪速大学医学部の教授の椅子の方が、経済的に恵まれている。

研究費の寄附、特別診療に対する謝礼その他についても、大阪の財界人のそれは、群を抜いていた。もつとも、そんな額について、教授同士が口の端になどのぼせることは一度もなかったが、実力者と見なされる教授の教室と、教授の生活は、とても国立大学の微々たる予算や、教授クラスの給料ではまかなえぬ水準を維持している。

昨日の胃癌の手術の患者の場合だって、そうであつた。三光紡績の社長である患者は、以前から第一外科教室に多額の寄附をしてきている上に、教授である自分と助教授の財前五郎との両方へ、ちゃんと特診料として謝礼を届けて来ているのだった。

しかし、財前五郎が、自分に代つて執刀したことを考えると、東は俄かに不愉快になつて来た。最初、胃体の病巣を切除する診断を下していたのが、精密検査の結果、噴門部だと解ると、患者の家族の方から、財前助教授に執刀してほしいと云い出して来たのだった。それに対して、財前が、（主任教授をさしおいて、私など助教授が——）と極力、なぜ執刀を辞退しなかったのか、それが東の神経に障つた。それとも、財前は、執刀を固辞することなど思いもつかぬほどに自分の力倆に自信を持ちはじめているのかと思うと、不快な怒りとも、嫉妬ともつかぬ湿っぽい悪感が咽喉もとへ、這い上つて来るのを覚えた。

教授室の扉をノックする音がした。応答すると、庶務の女事務員が、

「郵便物でございますが、どこへお置き致しましょう」

「そこへ置いておき給え」

彫像のような固い威厳に満ちた声で応え、女事務員は、おずおずと広いテーブルの端に郵便物の束を置き、恭しい一礼をして退つて行つた。

医事新報や臨床外科、外科学会誌などの医学専門雑誌と、製薬会社や医療器械会社からの文献、

それに患者の紹介状を同封した知人からの封書など、東は、何時ものように事務的にざっと眼を通し、短くなった葉巻の火を消そうと灰皿へ手を伸ばすと、帯封の解けた週刊誌が灰皿の横に置かれているのが眼についた。

解けた帯封に『浪速大学附属病院第一外科御中』と記されているから、さっきの事務員がここへおいて行ったものであるらしい。見るともなく、ぱらっと頁を開くと、美しい令嬢と夫人を連れて外遊している総理大臣の近影が麗々しく巻頭のグラビアを飾っていた。次の頁を繰った途端、東は、視線を硬らせた。

そこには、手術衣を着て、手術室で食道癌の執刀をしている財前五郎の精悍な顔が、大写しになり、『魔術のようなメス、食道外科の若き権威者』という誇大なキャッチフレーズが附されていた。東は、いきなり、眼に塵埃が飛び入って来た時のようなごろりとした異物感を覚えた。『魔術のようなメス』という表現は、職人芸に繋がる言葉であったから、一向に差しつかえなかったが、『食道外科の若き権威者』という言葉が、氣にくわなかった。まるで第一外科の主任教授である自分の権威を土足で侵害されるような無礼さが腹だたしかった。

自分としたことが、こんなつまらぬことを、医学専門雑誌ではなく、たかだか週刊誌の素人記者が書いた記事ではないか——自分の威厳を損うことを怖れるように、週刊誌のグラビアから眼を離したが、白いものがまじった眉と細い眼に、険しい色がにじみ出て来るのが、自分でも解るようであった。これも、停年退官で教授の椅子を去って行かねばならぬ人間の寂しい焦りだろうかと、自嘲に似た笑いをうかべてみたが、やはり氣持が落ち着かない。思いきり、ぐるりと回転椅子を廻して、窓の外を見ると、眼の下に財前の大きな体が見えた。診察衣を着たまま、両手をポケットにつつま込み、煙草をふかしながら、自分と同じように増築中の新館を眺めている。

東の胸に、黯い影のようなものが拡がった。わしが十数年もの歳月をかけて築き上げた名声と信用を持つ浪速大学病院の第一外科を、自分の下で八年間、女房役を勤めた助教授だからというそれだけの理由で、むぎむぎと手渡さねばならないだろうか——。なるほど、財前五郎は助教授として有能であるし、自分のために医局の雑務一切を引き受け、教室の業績を上げることにも力を尽してくれたが、それは、何も財前五郎に限ったことではない。どの科の助教授も、同じように働き、教授の椅子を得るためには、誰もが、どうしても通過しなければならぬポジションであるに過ぎない。そう思うと、東は、眉を開き、机の上の電話器を取り上げた。

電話器の向うに鵜飼医学部長の太い声が聞えた。

「やあ、何ですかな」

「実は、ちょっと、ご相談したいことがありますね」

「私に相談したいこと？ 藪から棒に一体、何でしょう」

鵜飼は、東から、停年退官後の相談を持ちかけられることを用心するような気配であった。

「実は、私の方の教室のことで、ちょっと相談したいことがあって、いや、あまり時間はお取らせしませんよ、例のところで、久しぶりに飲みながらでも——」

気軽に持ちかけると、

「ああ、そんなことなら、じゃあ、五時半ぐらいから久しぶりに一杯やりながら——」
向うも気軽に応じた。東は受話器をおくと、医局に繋がるインターフォンを押した。

「ご用事でございますか」

「財前君が部屋へ帰っていたら、ちょっと来て貰いたいんだ」

と云うと、東は、新しい葉巻をくわえ、ゆったりと足を組み直し、威厳と余裕を持ったポーズ

を整えた。教授室の扉が開き、財前の姿が見えた。

「部屋へ帰って来たばかりでございますが、何か急なご用でもおありですか」

「いや、急な用ではないが、まあ、かけ給え」

財前に椅子をすすめ、

「どうだね、今日の外来は？」

「相変わらず、患者が多過ぎます、一体、どこから集って来るのかと思うほど、次から次へとやって来ますね、初診の診察日は、午前中に四十人ぐらい診なくてはなりませんから、どうしても正午までに終らず、うかうかすると、二時頃までかかってしまいます」

「君んとこにも、紹介患者が多いんだろう」

紹介状を持った特診患者のことであつた。

「はあ、特診は出来るだけセーブすることにしてはいるのですが、つい何やかやで……」

「君は、食道外科の新しい権威者だそうだから、特診患者が多くて当り前だよ」

皮肉な云い方をした。

「いえ、私など若輩の助教授が、権威者などと、とんでもない話です——」

新館建築現場で見せた自信に満ちたふてぶてしさとは、打って変つた謙虚な態度で応えた。

「いや、君がいくらそう謙遜（けんそん）しても、ここにちゃんと君が新しい権威者であると喧伝（けんでん）されているよ」

さっきの週刊誌を取って、財前の前に広げた。

「君のグラビアだよ、"魔術のようなメス、食道外科の若き権威者" というキャッチフレーズがついている、君もなかなかえらくなつたものだね」